

Zoom とロイロノート・スクールを用いた双方向型オンライン授業の実践

— どの子も楽しく「分かる・できる」オンライン授業を目指して —

山田光太郎（熊本市立日吉小学校）

概要：本研究では、2020年3月から5・6年生にZoomとロイロノート・スクールを活用して双方向型のオンライン授業に取り組んだ実践である。本稿ではまず、オンライン授業を行いながら明らかになった学習意欲や内容理解などの課題を示し、オンライン授業の具体的な場面でどのように授業改善を実践したかを述べている。また、授業を支える取り組みとして、ティーム・ティーチング（以下T・T）での複数体制による指導なども加えている。次に、児童の学習アンケートを用いて授業実践の効果を考察し、オンライン授業を支える重要な要素についての結論と、これからの課題について述べている。

キーワード：双方向型オンライン授業、タブレット端末、指導の工夫、個別の配慮、T・T

1 はじめに

オンライン授業を実践した6年児童は、普段からタブレット端末を使う頻度が高かったため、休校中、端末が整い次第すぐにオンライン授業を開始することができた。

しかし、双方向型のオンライン授業を行うにあたり学習側と指導者側に以下のような課題点が明らかとなった。

【学習者側】

- ① ミュートやチャットのルール確立
- ② 学習者側の端末のネット環境の整備
- ③ 課題の集積による意欲の減退
- ④ 参加しているフリをする児童の存在、

【指導者側】

- ⑤ 一方通行しがちな授業になりやすい
- ⑥ 教師側の端末のネット環境の整備
- ⑦ ノイズ（音声、画像）の低減、
- ⑧ 個別支援の限界

音声・映像等のノイズや、授業のルールづくり等は授業を重ねる事に改善されていったが、④のような授業参加の意欲や⑧のような個別支援に限界があることなど、授業者が見取りづらい課題が明らかになった。そこで、「周囲の刺激や誘惑に負けない、どの子も楽しく分かりやす

く、できた実感のある授業づくり」と、「個別支援の限界に対して、どれだけ自力解決のための手がかりや個別の配慮ができるか」が重要になると考えた。そこで、どの子も「分かる・できる」授業ユニバーサルデザインの視点『指導の工夫「焦点化・視覚化・共有化」と個別の配慮』が必要であると考えた。

また、学習内容や端末の操作に関する個別に届く質問への対応など、個別支援と一斉指導と同時に行っていけるように、ティーム・ティーチングの複数指導体制をとり、2クラス同時に授業を行うようにした、

① 指導の工夫「焦点化」について

「焦点化」とは、何のために、何を教えるかを明確にし、内容や活動を絞り込むことである。児童は自宅でオンライン授業を受けているため、周囲の刺激が入りやすい。授業時間を30分以内にし、学習内容や活動を絞り込んだ。

② 指導の工夫「視覚化」

「視覚化」とは、視覚的な手がかりを効果的に活用することである。オンライン授業では、図や資料だけを提示しやすいため、課題解決や理解を深めるための視覚的な手がかりを活用した。

③ 指導の工夫「共有化」

「共有化」とは、話し合い活動を組織化することである。オンライン授業では、ペアやグループで話し合い活動を取り入れることは難しい。しかし、ロイロノート・スクールを活用することで、友達の考えを全体に共有しやすくなる。

④ 個別の配慮について

個別の配慮とは、指導の工夫を行っても困難が解消されない児童へ個別に行う配慮である。オンライン授業では机間支援ができないという側面から考えると個別の配慮が難しい。本実践では、子どものつまずきを想定し、課題カードに手がかりを添えるなどの配慮を行った。

⑤ T・Tについて

双方向型オンライン授業を支える取り組みとして、T・Tによる複数指導体制をとり、全体指導と個別支援の役割分担を行った。

■T1 メイン・ティーチャー…全体指導を行う。

■T2 サブ・ティーチャー…チャットを使った個別の質問等に対して返答をしたり、ヒントを与えたりする。

■T3 サブ・ティーチャー…支援が必要な児童を中心に励ましたり注意を促したりする。

2 研究の方法

(1) 調査対象および調査時期

調査対象は本校6年児童、調査時期は4月15日から5月28日までである。

(2) 分析方法

アンケートより、授業が楽しかったか、分かりやすかったかこの結果をもとに分析する。

3 結果

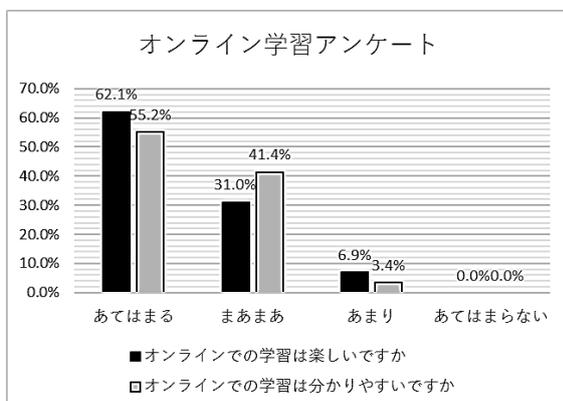


図1 オンライン学習アンケート

アンケートに答えた児童58名のうち、「オンラインでの学習は楽しいですか」という質問に対してあてはまる・まあまああてはまると答えた児童は全体の93.1%「オンラインでの学習は分かりやすいですか」という質問に対してあてはまる・まあまああてはまると答えた児童が全体の96.6%だった。

4 考察

指導の工夫や個別の配慮を取り入れた双方向型オンライン授業に取り組むことで、多くの児童がオンライン授業は楽しい・わかると感じていることが分かった。あまりあてはまらないと答えた児童の感想には、「途中で途切れることがある」「頭に入りづらい」などがあり、接続環境や参加の仕方によっては児童のオンライン授業への印象は変わってくるということが分かった。

5 結論

双方向型オンライン授業を行うにあたり、普段の授業でタブレット端末の操作に児童が慣れておくことが必要である。しかし自宅では周囲の刺激の中で行う学習であることを踏まえると、楽しくて分かりやすい、魅力ある授業を行うことが重要であり、指導体制の工夫も必要である。

対象の児童の多くは全学年より持ち上がった学年である。今回のオンライン授業で、児童のつまずきを想定した手がかりづくりができたのは児童の実態を把握できていたからである。

したがって、オンライン授業を支える重要な要素は普段のICT活用と児童の実態把握であることが明らかになった。

6 今後の課題

教室で授業を受けることができなかった児童が、オンラインなら受けることができた児童がいる。現在、教室とオンラインのハイブリッド型授業について実践中である。今回明らかになった結果をもとに、更に双方向型オンライン授業を発展させていくことが今後の課題である。

参考文献

桂 聖 (2011)「国語授業のユニバーサルデザイン」東洋出版社